

大谷大学 真宗総合研究所東京分室 公開シンポジウム

『宗教といのち』

——日韓台の終末期医療の現状から「良い死」を考える——

大谷大学真宗総合研究所東京分室（所在：東京都文京区湯島）は、本研究所の設置目的にもとづき、本学が社会に対して責任を有する研究分野において、若手研究者に研究機会と環境を提供しています。「現代と自分がかかわるか」「現代で自分はどのように生きていくか」を根幹とした研究テーマを持ち、とすると専門分野の研究者にしか通じない言葉で語られがちな研究成果を、一般の方々に理解される言葉で語ることでできる次代の研究者の育成をはかっています。

真宗総合研究所東京分室では、室長及びPD研究員による「宗教と社会」をテーマとした共同研究を行っています。本研究は、多様な価値観を内包する現代社会にて、社会における宗教の役割を問い直すことを目的としており、当該研究の活動の一環として、この度公開シンポジウムを開催することといたしました。

本シンポジウムは、日本、韓国、台湾の終末期医療の法制度と医療現場の現状に関する検討を通して、それぞれの国・地域における「良い死（または望ましい死）」の考え方や課題について、宗教的・倫理的な観点から考察するものです。

近年では、終末期医療に対する事前の意思表示の重要性が強調され、延命治療の取捨を含め、自分の最期は自分で決めることを「良い死」とする傾向が見られます。とりわけ終末期医療の法制化が発展している韓国と台湾では、この傾向が顕著です。これに対し、日本では法制化がなされていないものの、終末期医療に関する事前の話し合いと指示書の作成を推進する動きが見られます。こうした自己決定に基づく「良い死」の考え方には、どのような倫理的問題があるのか、またそれに応じて宗教の役割にはどのような変化があるのか、という新たな課題が提起されています。

そこで、本シンポジウムでは、日本、韓国、台湾における終末期医療の発展と法制度の動向を概観し、「良い死」の概念をめぐる文化的・社会的背景を検討します。また、臨床宗教師の活動報告を通して、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって顕在化した問題を注視しながら、現代社会における「良い死」のあり方と宗教の可能性について考えていきたいと思います。

つきましては、紙面等にてご紹介いただきますようお願いいたします。なお、取材等のご希望がございましたら、お手数ですが下記までご連絡いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。



真宗総合研究所東京分室

真宗総合研究所東京分室
東京都文京区湯島2丁目19-11
東京室長
井黒 忍（大谷大学准教授 東洋史）

PD研究員
青柳 英司（真宗学）
鍾 宜錚（哲学・倫理学）
荻 翔一（宗教社会学）
陳 宣聿（宗教学）

公開シンポジウム

大谷大学真宗総合研究所東京分室主催

宗教といのち

日韓台の終末期医療の現状から「良い死」を考える



- ◆発題1 鍾宜鐸 大谷大学
台湾における「善終」の法制化と宗教的実践
- ◆発題2 湧上恭子 慶應義塾大学
韓国における終末期医療と尊厳死
—「死の自己決定」と「死にがい」をめぐる—
- ◆発題3 金田諱晃 東北大学
緩和ケア病棟での活動から考える「良い死」
—臨床宗教師の視点から—
- ◆コメント 藤枝真 大谷大学
- ◆司会 陳宣事 大谷大学



問い合わせ shin.tokyo3021@gmail.com 大谷大学真宗総合研究所東京分室

2022年2月12日(土) 14:00-17:30

オンライン開催 事前申し込み要 〆切2月10日